

学位論文要約データ

小山智朗

本論文は、＜私＞を生きるという視点から、自己の持てる可能性を懸命に生き、他者や世界と深く関わり合う体験を通して、不断に自らを変えていく自己のありかたについて検討を行うものである。クライアントはどのように＜私＞を生きるようになるのか、それにセラピストはいかに関われば良いのか、また、そもそも＜私＞を生きるとはどのようなありかたなのか。そうした問いについて、心理臨床学の視座から探求するというのが本論文の趣旨である。

第1章では、「私」という言葉を用いた心理臨床学の研究を概観し、「私」という言葉自体がもつ意味を検討した。その中で「私」という言葉には、日常語としての生きた豊かな意味があること、また他者との融合するほどの深い関わり合いが前提として想定されていることが示された。さらに、「私」は普遍性と固有性という対蹠的な意味を持ち、普遍的な変化と同時に、それぞれに固有の変化も捉えうるということが示唆された。

そこで、本論文では「私」を発展させた＜私＞という概念を提示し、「世界や他者を対象として認識し、能動的に働きかけるのと同時に、他者や世界からの動きも受け入れ、緊密に関わり合う体験を通して、絶えず自らを変化させていく主体」と定義した。つまり、世界や他者を客観的に認識し、それに基づいて能動的に行動するという近代主体的なありかたを備えつつ、それに加え、他者や世界との相互関係に開かれ、その体験の中で認識や行動を新たにしていくものとして考えた。この＜私＞について、自らの可能性を最大限生き、他者や世界と関わり合う体験を通して、一生を通じて絶えず自らを常に変えていくものと考えため、＜私＞を「生きる」という言葉を用いることとした。

第2章では、＜私＞という概念と関連度が高いと考えられる「自我」「自己」「主体」「アイデンティティ」といった心理学的概念と比較しつつ、＜私＞の特徴について理論的な検討をおこなった。その中で、＜私＞は他の心理学的概念と異なり、個人の精神の中核にある実体ではなく、他者や世界と緊密に関わり合う動きと考えられること、特定の時期だけではなく一生を通じて絶えず変化することに、その特徴があると考えられた。

第3章では、抽象的で不可視の＜私＞の動きを見通す視点として、「水平性をめぐる動き」「垂直性をめぐる動き」という2つの観点を提示した。「水平性をめぐる動き」は、「他者や世界と関わり合う動き」とし、能動的に世界に働きかけ他者に関わる動きだけでなく、世界や他者からの影響を感受し受け入れる動き、どちらの動きも捉える観点である。また「垂直性をめぐる動き」は、「世界や他者を認識する動き」とし、垂直上方から鳥瞰的に認識するように他者や世界と距離を置いて客観的に対象化していく動きと、他者や世界との体験の中で直接的に直観していくような動き、その両方を捉える観点である。

続いて、この2つの観点から主体のありかたの歴史の変遷について検討をおこなった。その中で、他者や世界と深く関わり合いながら、認識する動きも失わない、「水平性をめぐる動き」「垂直性をめぐる動き」を兼ね備えた＜私＞について考えることは、歴史的な文脈においても重要な意味をもつことが示された。

第4章からは臨床事例を提示し、〈私〉を生きるプロセスについて具体的に検討をおこなった。まず第4章では、自閉症スペクトラム障害の子どもにおいて、いかに〈私〉を生きるプロセスが展開し、〈私〉を生きるという視点がどのような意味を持つのかについて考察した。はじめに、自閉症スペクトラム障害をめぐる先行研究を概観し、彼らへの心理療法的アプローチの有効性について検証し、〈私〉を生きるという視点の意味を検討した。自閉症スペクトラム障害を抱える子どもは、器質的な問題が大きく、生来的に他者との愛着関係を樹立することに大きなハンディを背負い、孤立した生き方を余儀なくされる。彼らは、人への本能的相互反応性が生得的に低く、また世界への関心や探索への動機づけにも乏しく、限定された形でのみ世界と関わることが多い。このようなありかたにより、ただ人間関係や社会性の問題だけに留まらず、他者との関係性が介在する認知的側面の発達まで障害されることになる。つまり、彼らは〈私〉を生きる第一歩目において極めて困難な状況にあると考えられる。

そこで、自閉症スペクトラム障害を抱える小学生の遊戯療法の事例を提示し、〈私〉を生きる根源的なプロセスを検討した。その中で、この〈私〉という視点があることで、自閉症スペクトラム障害を抱える子どもが、他者や世界と緊密に関わり合う中で変化していく動きを積極的に捉えられることが示唆された。

第5章では、神経症における〈私〉を生きるプロセスについて検討し、〈私〉を生きるという視点の意味を考察した。はじめに、神経症をめぐる知見を概観した。神経症水準のクライアントは、主に心因によって問題が生じており、世界や他者との深い関わりを失い、他者と過度に同一化することで、生き生きとした情緒に乏しく、内なる様々な思いを十分に磨き上げられずに心身の異常を呈することが多い。つまり、〈私〉の基盤は成立しているが、心因により〈私〉を生きるプロセスが滞っている状態にあると考えられる。

そこで、抑うつ傾向や不安を訴えるなど、神経症的な様態にあった中学生の事例から〈私〉を生きていくプロセスを検討し、神経症においても〈私〉を生きるという視点が重要な意味を持つことを示した。

第6章では、母親面接において〈私〉を生きることの意味について考察した。

まず、母親面接をめぐる先行研究を振り返り、母親面接の構造的な問題と心理的問題を整理し、それらを乗り越えるために、子どもの話しを具体的に聞くという基本姿勢や、母親面接を見通す2つの視点を提示した。

子どもは、発達早期から母子の密接な関わり合いを通して、他者への基本的信頼感を培い、それを基盤に対人関係や世界の体験へと向かっていく。そのため、母親面接では、他者（子ども）と分離し「個」を形作る動きだけではなく、他者（子ども）と密接に関わり合う動きも視野に入れておくことが不可欠である。〈私〉という視点があることで、母親の「個」という主題に焦点を当てつつ、母子の相互浸透するような関係を通して相互に変化する動きも掬い上げられると考えられた。

そこで母親面接の事例を提示し、〈私〉を生きるという視点から母親面接のプロセスについて検討をおこない、〈私〉という視点は母親面接においても意義があると考えられた。さらに〈私〉という視点は、特定の年齢や発達段階にあるクライアントだけでなく、成人期の事例を検討する上でも重要であることが示唆された。

第7章では、セラピストの関わりについて総合的な考察をおこなった。まず、これまでの事例検討を踏まえ、クライアントの主体性を徹底して尊重し、クライアントの主体的な言動を受容することの重要性を示した。とりわけ、否定的な感情、暴力や攻撃性といった否定性について〈私〉を生きる苦しみとして心理学的に理解し、受けとめることの意義を指摘した。

そうした関わりに加え、苦難を伴う〈私〉を生きるプロセスを支えるためには、クライアントの生きる世界に身を置き、共に体験を深めていく必要があると考えた。そのありかたについて考えるために、まず筆者が面接中にヴィジョンを体験した事例を検討した。それを手掛かりにして、〈私〉を生きる苦しみがピークに達するような臨床の場に内在しながら、プロセスを支えるありかたの検討をおこなった。本論文では、〈私〉は他者や世界との関わり合いの中で変化していくと考えており、当然セラピストの〈私〉も、クライアントとの相互関係の中で影響を受けると考えられる。そこで、セラピストが〈私〉を生きるという視点からセラピストのありかたを検討し、クライアントの〈私〉を生きる苦しみに徹底して添うなら、セラピスト自身の〈私〉も一旦解体し、しかし再び生成するような体験をすることが示された。

次に、セラピストが〈私〉を生きる体験をする意義について論じた。セラピストの〈私〉が解体するような体験については、単に能動性を失った事態というだけではなく、クライアントを真に理解し、受容する意味があることが考察された。さらに、セラピストの〈私〉が象徴的に死ぬ程の受動性に没入しつつ、同時にそうした受動性を能動的に深めたり、状況を俯瞰的に把握し直していく、つまりセラピスト自身が〈私〉を再び生成していくことで、クライアントの〈私〉のプロセスを支える可能性が示唆された。このセラピストが〈私〉を生きるという視点があることで、セラピストの内的体験自体に、またその体験を自らの内で深めることに創造的な意味があることが明らかになった。

最終章である第8章では、まずこれまで得られた知見をもとに、〈私〉とは何かについて考察した。〈私〉は、他者との関係に開かれ、その関わり合いの中で一旦解体するような位相に開かれ、同時に再び生成していく、つまり「解体」と「生成」を繰り返すありかたであることを示した。〈私〉は、同一の状態が半永久的に連続するものではなく、世界や他者との体験を生き、自らを一旦解体し、状況に応じて再び柔軟に変化させていく。そのため、他者との関わり合いや世界との相互作用において、絶えず新たな〈私〉へと刷新され、〈私〉を生きるプロセスは一生続くと考える。

次に、〈私〉を生きるという視点の意義を検討し、これまで積極的に研究の対象とされてこなかったクライアントに光を当てられること、従来の概念と補い合ってクライアント理解を深めることが示された。それにより心理臨床学の研究を進展させ、臨床実践に貢献する可能性が示唆された。

さらに、否定性について総合的に考察を加えた。否定性は、〈私〉を生きるプロセスに伴って生じる、いわば生みの苦しみの表現であるという考えを示した。それと同時に、否定性自体に創造的な意味があり、他者や世界と距離を置いて対象化する「分離」の働きと他者や世界と「つながり」の働きという2つの働きがあることについて論じた。否定性をセラピストが受けとめることで、「分離」に加えて、「つながり」の働きが促され、〈私〉のありかた自体を変化させることが考察された。

最後に、今後の課題を示した。本論文で提示した〈私〉や「水平性をめぐる動き」「垂直性をめぐる動き」「否定性」といった概念をめぐっては、その意義と限界をさらに明らかに

し、概念自体を精緻化することが求められる。また<私>を生きるプロセス、そのありかたは本論文で示したモデルに収斂されることはなく、年齢、障害の有無や程度、環境の違いによって、多様な現れをされると考えられる。今後、理論や先行研究との比較・検証をおこないつつ、事例検討を積み重ねる中で考察を深める必要がある。